續草庵集蒙求諺解　一

春
夏

續草菴和歌集蒙求諺解巻第一

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

春

立春のこゝろを

久方の天のかく山神代よりかすみ初てや春はたつらん

かく山は。春の立て。霞む儀をこめる事。古来の例也。奈良の都は南にあたりてちかくよくかすむ。京よりはとのぞかなる也。神代よりかく山の榊をとりて岩戸の前に立て
し事ある故。神代とよめるも縁ある事也

早春

山深み霞も敷して春のくるしるしもみえぬ嶺の杉村

古言はこゝろの山本意しく〜はさらにひさませ枝しそなる門

此かの歌は祇園社にて松よりかすみの立を立春のしるしとなしたるは早春
の体節ぞ。よしよし山にて見えねども。まづ霞みへやらぬゆへ春
のきたるしるしも見えぬ也。こゝの松をしるしとみて見
れば。それよりまへて。こゝの松村もかすめゆへ春のしる
しもみえぬ也

入道二品親王家五十首哥に

きえがてし松乃雪ぶかく埋れてこゝ山も春としる霞か

こゝは松の雪だに消なくに松への…なつみそりよ　古春　消が
ては消がたき也。松の雪はきえやすき…れども。こゝ山ゆへ
春来りてもきえがたき也。かゝる山なれども。春は来りける
とて。そのきえがたき松の雪へもうづもれて。霞のたつ事か
いつくもは節の到来する事へとしれぬ理也さ感ずるも
あり

海邊早春

難波がた霞もうみを渡しては春ゆくへて浦風ぞ吹
餘寒をゆへ浦風吹そし。霞もたちそて見えぬ也。波は冬の
やうにつめたくいたゞず。春風ゆへゆへ見えぬしかたもせ也
まだ也春をもまださへそて風吹也

海邊霞

前軍家三首に

次は浦の霞もあまの衣しほや塩風吹ばまたもどすらん

すまのあまは春やさ衣おさをあらみまどをにあれや霞がさま
さぬ古人ふか到ゆくはうき世なれどやすまのあまは塩焼衣ま
ど我ぬらん　新古今三　徽子女王　霞の衣しほみつれば。霞もあまの衣
しそやらん。塩風のふけばまどをなるとこ也。まどをとは
出でしくまどうすき体也正篇意に出

浦霞

あまりにすむ里をしられども定めて霞は袖にかゝる浦波
霞の袖は霞の衣に同じ。正徹稿本に霞にもあり。霞は
あまびとすむ里を定めずして出れば、あまはいづくに居るとも
しらずして出る霞の袖に波のかゝるなり。霞をあま
の袖といひて波のかゝるとよめり

湖霞

又あれは海をいろいろをみてぬ曙に霞たなびく湖あさ浦山
曙(あけぼの)は一入霞のふかくいづくにみえぬ湖上(こしやう)に沖(おき)つ浦山の霞
の内にかりたる事をよめるなり

雪中鶯

鶯は冬ぎを侍る春をまちわびたしとなりけれ本歌は
鶯の谷より出る声なくは春くる事をたれかしらまし　大江千里　古今春上
春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ　忠岑　同上

鶯は春のさきがけとつげたるを、鳥のよるゆへ却(かへり)て春の春
までいひさかへたどる也。学ぶるは知るらん。れどもつゐに
候也。どうりも程のみ也

和歌所にて　竹鶯

風さへ(さえ)て竹霜に降る竹の葉に宿れしけなき鶯きえ
霰みだれて霜に降る今も春なれども竹のかげにまよひま
ぶ風もさえ竹のきは霜もこほりふるたびとうり鶯の
なきばかりはのどかに春めきしたる也

曙鶯

たれか霞つゝてく鶯は夢すりあくる山のかげうち
山清いはまだたちを霞がくれにちりて、ゆかくされども鶯の
なくゆる声の知らるゝ也

春雪

摘まん花しかみよしや注りなるん庭にふりしける春のあは雪
本 春くれば花とやみなん雪のかれ枝に鶯ぞ鳴　素性 古春上
春来てハ花とも見よと片岡の松のうは葉にあは雪ぞふる　仲実 新古
上 春の雪なれば。庭まではさえゆけども。摘まん花と見なさ
てやらん。さらんもせびつかる也

野若菜

山さとの今朝山路より来たく山隠れいりぶの小野にいかで摘らん
山城の岩田の小野のはゝそ原見つゝや君が山路こゆらん　式子内親王 新古今
旅中 何人か餘寒のはげしきに山路をこえて岩田小野
に若菜をつむらん也。岩田小野ハ山城也

入道二品親王家五十首哥ニ

きのふまで雪を野べに見しかど消るもまさで若菜摘らん
雪ましくは。きの消るを云也。春来ても雪の消る事ハおそき

て。毎日ふるまじく。今ハ雪のふらぬ時を。雪まふしとて。消る時
なきをもまたず。若なつむとて也べしと也。若菜ハ正月七日
につむゆへ。消まをまつことなむもなき心をのべたるは。その
去況 自然とあるべき也

前関白家にて若菜

消あへぬ雪れ下草打払ひ袖みだしみだし若菜摘らん
春の来てハいそぎて若なを見せんと思ふ人ども。どこも雪の
ふりければ。せんかたなく。まづ消あへぬ雪の下なる草葉を
打払て。まろうた中にまじりたる若菜をつむ也
例 みよしのハ春のけしきに霞めども結ぼほれたる
雪の下草　紫式部 新古春　みよしのゝを若なつむらん巻向のひづゝ
霞の日数経ぬれば　新勅 秋元
かなしうこそを

春あさきかたみにくめる水よりもたまらぬ物は若菜なりけり

うれしげに君がたのめし言の葉はかたみにくめる水にぞありける 讀人不知 拾遺一

折てみる人もありぬべし春の野のかたみにつめる若菜なりけり 貫之 新古春上 かたみは竹にて作りたる籠也 和名曰笭箵（かたみ） 和名賀多美 小籠也。哥の心は、まづ春の浅き頃なれば若菜すくなくて、つめども、かたみの内にたまらぬなはよへば、かたみに入てくむ水のごとくなるをあまりにもたまらぬと、餘情（よせい）に云也。かたみは水をくむものにあらねども水のをりてたまらぬものなれば、たまらぬ事をいはんとて今若菜をつみ入る所のかたみをとり合せていふ也

將軍家の題をさぐりて人々哥よみ侍しに梅花を

吹ぬ日を待て白く梅が香をそへむや風のさそひてもくる

一本此哥題苦に依りて夜梅の題。哥苦に前に出

風の間に梅の匂ひハ也。風の吹絶するもまづ梅の匂ひはいかさま風の吹ぬ日に梅の香をさそひて宿に吹ためておきたるゆへ今する處しと也。梅がゝを夜その嵐の吹ためてまきの板戸のあくるまちけり 大江嘉言 後拾春上 此哥をよりむする也

夜梅

隔てだにあくがるゝ夜の月影に人をぞ誘ふ梅の下風

隔てゝたゞはさあくがれしてさそふ人也。梅の下風の人を誘ひぬる事ハ春の月の面白きにあくがれありくに、まして梅の下風の花の香を吹来て人をも誘ふゆへ一入あくがれあるくも也。梅が香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる 友則 古春上 林和靖暗香浮動月黄昏の梅の詩。春宵一刻値千金花有清香月有陰の東坡の句引合せたる處也。面白

夜の氣色也。我宿に驚かされゆへに人なきも驚かぬと
なり

二條宰相雅經卿の哥に　梅薫枕

春の夜の寝覚の床はた枕もとさまの風も梅がゝぞする
續人不知 秋意四

哥の心は。枕のすきまの風もさむからず身ならぬ枕まで匂ふ
事は枕のすきまより吹入風の寒さをいとふも
ひしに。今は梅の匂ひにおどろかされて。ねざめしつれ
ば枕のすきまの風までも。梅の香のするゆへかへりて風
をまちする也

入道二品親王家五十首哥に　梅薫袖

梅が香もさながら袖にとまるらん嵐の末は匂ひげもなし
後京極院 續拾秋冬

嵐の末、例。散さる梅さへ人皆を定めぬ嵐の末の香も
也なり。さればこそは。それなからも也梅の梢の匂ひは。

皆ながらことぐくは袖にこめて。おのれはたゞもとや嵐の
さそひゆく香は。忍ぶすぢなければ。餘所へ吹行末の風に
匂ふまじきといひて。袖にしとまる匂のふかき證をとりて
也。波利質多樹華。一日薫衣。瞻匐華及師花雖千歳薫不能及華
嚴法幢菩薩。偈の心なるべし

将軍家三首に　梅薫風

此ごろは宿にみちぬる梅がゝにかぜよりさきに匂ふ春風

此心ハ梅の盛なれば。宿中に花の香のみちくてある
風が梢よりほかをもねどもいづくを吹ても風の匂ふ也

基任許かく三首哥によみ侍しに　梅

雪の間に咲初るより春ははやうつりし梅の盛なり

梅の花は春に先て咲初て。さて咲つゞくに盛に成なる
に。冬の雪の間に咲初ぬれば。春は早くより盛になりて。

咲初るといふ君かよきをば待かぬる梅の盛といへり此なり。
咲初るといふもなくびよ人は盛をかりしといふん也

柳露

本 青柳の糸あまりせば何をかもあさきよく露の玉のません

此みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か 遍昭 古 春上
片糸をこそよりかけてあはずは何を玉の緒にせん 読人不知 古 恋一
きく露もよハの胴も二 抜む 糸ハ露のふりきかかれば糸をぬく
とあり。青柳の糸まで糸露を玉にぬくをあらして。
柳の糸のなかりせば何をか緒にして露の玉をばぬくべく
ぞきと也

へ道二界魏王家久十首歌

今よりは木の芽春雨青柳の糸は緑をまさりやそしける

今よりとハ春まちそめてよりといふ也。木の目春雨とは春ハ木々
の目の張出る時なれば春といひけり 霞立木のめもはる
雪ふれば花なき里も花ぞ散ける 貫之 古 春上
二月ばかりとこのめ春雨をはじまりとしたく 拾遺 春下 春乃来て今
より八木のめうるほふ春雨も。諸木の中に柳のみどりを
先そむる故へ別して文の好見ゆると也。東。字彙曰七回
切。音次木芒也

為軍家よく 春雨を

あハ雪は花さしてたましくしきよりも暖るきとも春雨や
上下の句にてそくべてあめる説也。泥雪の花をりるにてもな
く暖しばふるともある事をいひて。それにても。春雨
はふりてもぶるやうにもあるさをふるとしもあるさといへり
春雨の長閑なる体をあらはしものハ助字也暖るきもあれ也

二條宰相来りて哥よまれしに　春夕（春夕雁イ）

ゆふ烏は翅おもきてねぐらにいそぐとも志らず春夜はかすみて

春夜ふかまりてその絶目霞しければいつくるとも志れぬ

ゆふ烏の翅の志ずまれて帰るまでくるゝ事なしと也

聖護院二品親王家にて人々まゐりて哥よませ侍りし　帰雁

待えてし雲井は雁の一つらや帰るも同じ心なるらん

ゆく行一行ぞ鳴る行はれてこそ数のたよりぞ帰るつゞかなる

雁人不知（古録）一雁は一行つゞ帰るを見んで定めて去秋つれだちて来

し一行は今帰るにもしかならば同じ友にてぞあるらん雁

行とて前後乱れず人のをさむ礼のおもやうの見えは。みなも

に卵の持人へかくるもなしといはすまじ。来りし時の数も

かならば同じ心につれだちて帰るなるらんと也

同文又十首哥に

志ら雲しるをもそ帰る夕ぐれの山とびこゆる春は雁金

秋風ふ山とびこゆる雁金のいやとをはかに雲隠れつゝ（人丸　古秋下）

雲も夕は山へ帰るゆへにともにぞ帰るといへり

夕帰雁

天津空かくれゆく雲はいづくまでくれなば花をかりは鳴らん

待人のかはにや鳴らん空に花ある月を詠て（四）

三峯の稚葉打出て雲よ花ある夕暮の空（寂蓮　千載）

めるまはたゞさへも迷ふつきにことに暮すばいよくやどる

も志れまじきに雲のいづくに花咲かんとて帰る事ぞと

也儀を一首にいひうけたる也

湖上帰雁

漕（こき）かへす舟にまかせて同じ波路にゆきも一人の

道りくぐ鵜の小舟がり帰り同じ人やゐるらん（續人不知　古恋四）

柳無小舟も浪まに見えみて有るは。それなりで又人も同じ
波に又まみて有る風景面白し。同じ人を見を同じ
浪にし詞をかりていへり。柳無小舟。返篇遊ぶ不遇齋の主
関白家より題を給りて讀出し哥也　俊房
是保隆雲妍此一人をまちえんや花なき里に春なき哉
本　春霞立を見すてゝ行人は花なき里に住やならへる　春上　伊勢
花なき里に住なひたれば。花さて春をは知らん。霞の
立して春を捨りて帰るも也。さて又その花なき里に住な
らひたる人ハ何して春をしるへきやうのなきまゝに一竹
るを待えてさてハ春也としりてあはれ也　雁がねの
帰るをきくと誠や花なき里の春はしるらん
たゞしんを
霞立空よりたゞして雪消ぬ山をおしけと雁やきらん

霞の河はいづくをおしちとも見えぬ人がくるゝ也。されど
ども人の有る沸はいづくも消えてして雪はなくごし
ちるまゝ雪のあるゆへ雪の色山をおうしにごしらせと
知やてだも出どしず。人れ有る也　巖松雪宿晴山北　橘在列　新撰朗
詠
ね軍家柳原亭まて三首哥語ある題し海
いだりさにまむらしもすゝきへりんえある春はかりか孫
んそらなるはんのおちつ不定なる儀也　山かほのゆ
がきをとにそ立霧もんそらなる人ハさだめず　々霧かき
くもれ浦風と見れば雑無月ん光ある人やさまると　る内 後於新
二数まもおしちまも住ず。秋ハ折。春ハ帰りてんの定ま
らぬ一人の心。志づしいらでまりをせよと也。人ハ定を見
れする事人で有るといふも。とり合せ面白し、

飛鳥井刑部卿雅朝 美野國。西田原より以ふ所成る讃岐
存孝 まさまさげ発しを。口入し侍しぞこ侍り侍
しまろやまもり侍し
おゐの口入し侍られしとも猶もそで出侍りし 此雅朝
より此哥を遂り給ふ也
古へよかへりを春の一人はむかえ侍るまそ孫をもゆう鳴
西田原をさまさげられて。侍りかねしる事を。一人の羽束
のつれて之侍らぬよみせていで
返し讃岐の差りまそへてや侍
おゐの返し也 後徳大寺 季孝
古里の道をまよひし春の人は玉ほこを
人の玉札の事蘇武が故事をも見る事なれハ記さぬ
秋風よ初一人今ぞすゆなるたゞ玉札をかけてきつる人 ☐交

古 秋 おゐのより玉札を古波へさしおくをもちゆらば何事も
なく相すむべきと云事を。人此雲はまよはず侍りや
うた。さわりなく鳩の鳴べきとたとへていへり
絶殿 頭付 重貞家ふく山花を
重貞部類云藤重貞 四位 傳無之續後拾遺作者
咲よりり山ハ桜よこりえれ初瀬の檜原見しぬ斗よ
初瀬の檜原も見えぬ斗に桜のさかりにて。初瀬山も花の
そこにこもりると也。こりえ。正篇初花よ出へりの詳の
人也
御子左大納言家三首 名所花
贈春のかすみひ来ぬらん みよしのゝ山乃桜よかゝる白雲
みよしのゝ古野の山乃桜花白雲とのみ見えまがひつゝ 續後撰 春下 讀人不知
此歌あげし。記すよ不及。本歌ハ花を雲とみて人の武哥

は白雲が花にかゝりてあるゆへ花にまがふと又か読る句也。年
こ雲を花にまがふと也

右馬以氏光朝臣家續侍しに　朝花

をれゆくをしられざりき吉野の花にかゝる峯に出る雲

花のうへに朝ゐる雲のかゝりしうちも雲も花も同じやうに
白きゆへ雲が晴しる説も花がそのまゝ雲のやうにて雲の晴
ぬるもしられぬもしらぬなき哉しられぬと云り。しれがたきを
と云をの字にて晴行もしられぬさきもと云んとなり

冷泉宰相蔡邸にて人々にかはりてうたよみ給しに

山花

咲ぬるを花ぞ白ふ山高み晴ぬ雲井や桜なるらん　小野貞材 古春下

歌人いひたとへば山高み晴ぬ雲ゐにまがふと云
花の白ふを世人はしられぬ雲ゐとみれは桜の雲にまま

かふにてあるべしと也。雲ゐとは。天をさして云。天には雲の在る
ゆへなれば也。禁中を。雲井の庭と云も。又たとへ比して云
なぞらへ也し。此歌にては。雲のしられぬ天と云ん也。宮に
雲のしられぬとおもひしれ。桜にてあらしよと云ん也。桜を
雲と見るとばかりん歌にては。花の雲が餘りやうなるゆへ。此
須寺。咲かる寺。高山より嵐の吹て散るを云也。山おろしと
云に同し。花を吹ちる寺まへ跡嵐の吹て散る句ふ也

元亨二年二條大納言家一日千首に　花

峰の嵐をまちて散りし咲てとく散花の盛に
散る谷には春もまてなれは咲てとく散花の盛ふ　古顕下
飼なりを丸半なる花の盛れまはまもなくて咲てもや
散地なれはいづくの山とひとつ所をさしてはしられず。一
方をみは。なるに一方の山の花の散盛なれはいづこに

まし主人一人あるやうにあくまでおもしろき也何方可化身千億一樹梅花一放翁 陸務観 此詩のこゝろ公子を思し。眼前の花ちるをなげきてぬる。かく花に對してあかぬ心から今して身をわけて花に咲て花を陪すや

散ものなれバしと云り

入道二品親王家五十首うたに

みよしの山とけ衣をかくしと花よりくうきさ林之人

山分衣は山をを分行時の衣也 清輔の影に白氷に重ねても衣よせと云へ。衣を山分衣をうてきましを左雑下 も張物すれバ。縁よ云て吉野山のふもとかたをさね立るか にまけ入て。日数を重ねしるとほぶけ春やと重ねるもさね らんも。衣の縁也 かの衣さ猶く馴よしつましあればなる くき時の旅をしぞせし 伊物 いつれも衣の縁まてる

めるる敷也

将軍家於京亭花乃宴に三首歌講ありしに 花

将軍家の若宗。正篇。春ノ上。等持院左大臣家のうたに奏し

山深く鳥のなくより散る花をすてぬるの法ふするまで 赤染

散る鳥の聲も聞えぬおくの山にふるきさめし人は古へ人 續古今 雑

鐘山ノ王安石。澗水無聲遶竹流竹西花草弄春柔茅簷相對坐終日 一鳥不鳴山更幽。山もいよりて深くなれば。鳥も住ぬ物也あ まりふかく分入て鳥も鳴ぬあの花の法までも散たる 也

同家にて。おなじく題を

山深くさまよふ人ぬ林よりり八重山ぞや櫻かな人

花より雲の八重ふかく山は川の花や流るらん 夫庵 御斉

新古説下 ふかきの沖ハ。山のふかきゆへ。まだおくまではかへずし
てやうく麓まで入てみれば。おくは八重の白雲たちこめて。
桜もそぞろなりしと也。ふかくの沖ハ。山ふかくハまだ分入ぬ麓
よりぞや八重にみる雲ハ。桜かへしと也。惣して雲の八重さ
川ども云ハ。おくし山の事にて麓よりハまだ八重たつまでもある
ましきに。今見れば麓よりや八重にみる也。いかさまにれハ
雲にてハなく桜にてあるべきと也

道助法親王家五首　暮山花

桜咲雲井はるての春風は空にしらるる花てりぞまさ
夕暮ハ雲のまがふでにおもむかふもなきくもかるとて　後人不知　古意
雲のうちでの事。旗の手はよくまたりと云説也。此か補中
抄よく叶はし。文長し略之。夕暮にたつ雲の体ありては此歌
は暮の字をもまれぬ故也し。哥のんハ。桜が雲のやうにて

のどく咲くれなど。天つ空よ花のみて白ひくりやうかする
と也。称讃御よいつる。常に雨種々上妙天華とある搖示の体相
をふくめり。天津空と云ハ。津ハ助字也。天も空も天也。同
し事を重ねて云也。もろつ法と云類也。続古載集に。此
哥ハ五文字を山桜としてゝ末同し詞の哥ありて作者光
参議雅経也。同御代なれば互に争い淡して思ひ咏しう
なり。但し此類二首ちがひある哥の事。此末。意旨詞意の
事よ也

聖護院家よ歌をさぐりて奉り侍りし　山家花

山里にいとふ人めハまれなるは花もやかくるるなまほん
山家にてはやまは人めのみをいとふに。今ハ花のかよか
あうて。何ともするくみのまうでそ花ゆへしそそあきらん。
子細は此花をみんとする人は。おしき事なれば。人よえ

せしてみよへだのかしこへかへりとするなしと自問(じもん)
自答(じたふ)の哥也

源宗行下坊として閑居花を
山里は猶なぐさむらんし花もある世をのどをくられ
世間(せけん)を捨れたる閑居(かんきよ)も人もなし独(ひとり)花を添れば心も一しかのどかにお
おのく花閑(のどか)は心のゆかりとしてあづさり旅縁也ありしが世中は絶て桜
のなかりせば春の心はのどけからまし 伊勢物語上 古今にも入れ侍る世中に花のあ附
ものゆゑのどかりしと也。本哥はすぢかふてよめる様也。又
絶てしなしといふをいひりん事ぞ花の色沸ものどかれぬ
物をしずこし本哥をさだめ出るんもかづき致たで
何と明く見る方まさりたる也蒙録の哥は 春れん
のどかりしとても何かせん後て桜のあるさ世なりせば 風春
此哥は本哥はさうふてよめる也。本哥の気やう顕

縦横(じうわう)の説を外さまし(く)たくみをはくへし

花風付殿しく　夕花を
いとゞ又雲と桜もみしかむと霞くら春れ山里の瑶
霞むぞかりまさへ見えるねよぞのへ又に至るゆへ。
へよく見えるぬ也。山のをとぞとめるに山の端へ見えずさ
て見え居すき雨なれ共霧み出るへよ又くらしゆへ山のを
の雲も花も見えねまぬ也いとく又へいよく又也

松隣花といふしくを
それの声に吹来る風の匂ふりれ松より外へみへぬ梢よ 山家一
松の花を尋ぬしてたれど松より外に花の梢もして見え
ぬよ咲くる風の匂ひはぶそへ松に尋ぬてしまして花のある
る迄しと也。山家にとて床へ松より外へ花も見えぬ山家
なりたる風の匂ふは花のあるたる迄しと也 「霧間春れ

しくもことをいれども。吹来る風は花の香ぞしける 元方 古春下

御子左入道大納言家歌合にて尋ねまれし歌よ 晴る 西行花

山のはに霞つつもなほ花は久しく見ゆるや雲の名残をみん

雲の中は霞て花の色の見えざりしが。今そらへ

見ゆるは。雲の居るてなごりにぬれて。霞も次第に晴け

なるべしと也

花は比。三寶院僧正清閑寺にて山居よりと尋へ

ておけて後　桜花といふ事を讀侍し

武里とぞ匂ひたる雲をむしといふ山桜の匂

匂へる雲は。湖に居る雲也。夕に居る雲も同し。又は兼 春

日山匂ひ居る雲のたぐひのきみぬ人すみて桜は 万四

春日野なに匂ひ居る雲の志くとまれは高き寸月ふ日

たけに 万四 夕なる雲ハ。一西諸嵩山花よ出。尋のん。山居

の事なれば。匂へる雲も桜もひとつ名に混じぞ匂

だにも埋む也。山家の家を得てしまあり

等持院贈左大臣家花又前にて　山花盛

芳野山花を残して白雲れまよふを　みよし野の春風

雲のまよふと云ハ。雲の立まよふ也去事也。又雲か花かと

見まがふ人のまよふ也。まがふと云も同し　儀也。まよふ疑也。よく

似たる儀也 例 新勅撰 山ざくら花よ春霞てまがひし雲

ぞ峯に残れる 摂政 新古春下 かづらきや高ねの雲を匂ひそ

まがひし花の名ぞうつろふ 隆祐 勅春下 花の盛りは風のまち

らぬゆへ花まよひて花はさそる雲をさそふ也。又まよ

ひし雲がりを風のさそふ也風もなんありて。花まよ

ふ雲をさらひて吹そらして。花ばかりをたてしうた

見するなるべしと云んとなり

聖護院宮木幡にまゐらせ給ひし時二条民部卿入道家にて　(?)
こゝに来暮して待ける　雨後花
雪とまがふ花をみて春雨ふれる時は花も山風ぞふく
雪のふるまではかゝらじ雨のふりて雪ともみゆ寸也
なれば今春雨の晴る後は風の吹て花のちるは雨後なる雪の
ふるやうにみゆる也

杜花

桜色に又深くしぐりまがふ色かさね染てし衣手の森
本 桜色に衣はふかく染て着ん花の散なん後の形見に　紀有友　古春上
名を衣手の杜といふゆゑ。衣を伸ふしてよそとの衣のや
うにいひたてゝある也。さて此杜とは雲が衣手の
杜なかりて衣手を雲の色にそめたるやうなるをしが。花
の咲ければ又衣手を桜色に染たるやう也。色かさねし
衣と云縁にて。杜のよそく雲が色かさねしとてしのてへ
助たる也色かさねし也

古里花

春毎に花をも人のをしまずて待まさぬ志賀の古里
志賀は昔こそ都なれ。今は古里にて住もびぬれども。すぎ
花の後にて。毎年の春は花ゆゑ人のあるもあまた。たより
にしてさすが住もすてぬ也。たよりは力にしてのみ也
もし此花なくしては。たえても。住かたかるべしとのみこも
けり花のおかげ也

花間鶯

こづたへば花そつまてこし鶯の羽風ぞ花の香に匂ひける
本 こづたへばおのが羽風にちる花を誰におほせてこゝらなくらん　そせい　古春上
花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべ

すみやる 友則 古今春上 花の香のすゝ風にさそはれてこし。鶯さそ
れども花のありかをあきらかにしらぬ也。今は朋風が
又花の香に匂ふ也。始は春風が匂ひしが今は朋風で又匂ふ也
又読始は春風に鶯もさそはれしが今又朋風に花の香りさ
そはれて匂ふ也

花為容

我のみや家路忘れん散花は心もとめぬ春の木の本
後人不知 古春下 此里に旅ねしぬべし桜花ちりのまがひに家路忘れて
花はまのれが木のもとまでもとゞめず。風にさそはれて。よ
そへちりゆけり。今は我ばかり花に心をとゞめて。家路に
かへる事をも忘れて木の本をさらで詠る也。忘れん
はまことにふかく心に眺。忘れてあらんと治定あらてにい也

惹薫袖

為来ぬるればし 折り 袖の花の香も深く染付し山ぞ奥なり
花を折りそへて。花にたづさへて袖にうつりて。花の香も深
くそみゆき。又分入山も深くに行く深くなる也。されば
まで花の香も。山もふかく染也。行の末も深くしに深く
染ぬる也。花に香かくぞ云ずして。目をかさねて山ふかく分入
んともおもへ

折花

みずらる山桜戸をあけて手ぐれる人ぞうれしき 寄花
足引の山桜戸を明けて我待君を出まれるぞむかへ人の袖
中将此方の道に難昭云。桜の本まで行りたる戸なり
すまきの戸。杉の戸。松の戸などいふがごとし云々 云此人の
哥の詞まで。足引の山桜戸をまれに明けて花とそある
ど雅代まつらん 拾遺 中 為もあるし花の嵐も雪とふる

山桜戸ハ明わのくえ　定家卿 春下　みかりけるかりきのをのよ
月ハくれぬ山桜戸ハまだやからまし　壬二 中　山桜戸ハ山
桜のあるあさまれ戸也此歌の読なり。依主釈也依主釈持
業釈之事ハ正篇ニ出せり。宣業するよ。桜戸ハ袖
中抄のことく根本ハ桜まて作る戸なる成し。真木の
戸。板戸。松戸。同之。たとへバ。須戸もまよ。松の柱。竹の垣石
の橋。さて是同じ製也。柴垣ハ小柴を大垣よしてもとも
も同じ。柴垣柴の戸。のくさへても不のへしても同じ。織なる
べし。詩文ニ。竹楼。茅簷。柴門。松門。蓬門。有。草庵。草戸ハ
草まて葺たる也又竹垣竹すのこ。芦屋芦戸。此屋此類皆同。
此枚此類。是等ニ植物ニなしらず。法の松の戸。蔵の竹垣
すらく植物の方人あるべし。植物ニ二句嫌也これまて
知べし。さて桜戸も花まてあるじ。荒も雲とふるな

どく花のんでまてそたる柳し。植物ニ無て。桜の是あ
きりの戸あふよ庵し。板の戸松の戸同之ハ前の様よよ
るべし。一概の了簡をなすべからず。山居ハ静かれる事を
このみて。人の来る事をもいと物也されども花の比まな
れバ。此寺が門をさしこめてをあるれず。桜戸をも明まて
花をたなしるよ付てもおくれ人のきてし此花を見ん
よからんなど思ふ折しも。人のきて花を見れバ何と
なく静かなるねのくるんもなく花をさへ折て行くき
也これ人の情なさに此門を明て置しけるゆへなれるべ
みる我心から。なす寺行くきる也さあを世めて後悔するよ
取の歌の奇よ　花見んとむきつく人のくるのみぞあ
かく桜の咎にありけるを引合見る庵し
御子左大納言家まてれなしんをき

はかりきぞあるべからぬ山桜かゝる小枝も花をたをらまで
花をたをれとみればすこしさはりて。かなしくおもひ
よる枝なきば。はやく散るにつけて。ふやう。花は堅
なる枝をたをりつゞき事也。かくしもうちおひよる枝をたをり
ては花もたまらずして。やがてちる也。気のつかぬ事をし
ふりとたしむかし　してまゐり

花は比関白殿蕣花園にへせ給て　山家都とつかふこと
をさまおほかられしに

今日かゝ御をれ春しやおのれざらん花咲山の陰に住せ
老の春 例 花にかゝ花あくがらしん外もの春ともまちまちべ
からで 為相風 執上 もの春といへば後の春といふんなれ。しかし
せしはあかひの元事にあひしたるときの春に逢と
以人も花咲山の陰に住せければこそ。花ゆへ御出ある

てぞの身はかひある春にさそはれ。花の陰に住ずは。御出ある
あはずじる程にと也。ともかくあるべし。とるかれ御出ある事を
待してい居り。かゝるはかくある也。かれある也

又は日ごしこまり中の結しに

時に御出あらし流れを中へ也

庭は雨に志づく子消えて花の香ためしまれなる詠を残して
関白殿御出は例もまれなる事なれば。その詠を残す
やうに。花の香も消るまに消なば。詠もあるまじき程
ふと也。花の香しるしむかしに香をばふむ詠のあらゆる跡
の香れやうに。詠を結ひしてといへり。志づくと云詞によんを付
庵しり。香なれば。久しくさらんぬ事はあらぬもの。志づくの縁也
ともしと云ん遍照哥に　乙女の姿志ばしとゞめんのの類にて。
なるぬ事ながら志づくかとすもしと云んあら詞也

これのべしは。故太閤双輪寺に御入の事ありと心得て
関白殿より此返歌に前方。父太閤公の。むかしの居給し。
双輪寺の庵室に。御入ありし事なりと心得給ふしなり
古をわけ給ひしと思ふゆへそ。桜又ゆかしき花は春の雲
いましへ父太閤公も双林寺の花を御入給ひしおもしろきと
ゆへなりそ。と花の文も。いよいよしくふかくおぼさすも。太閤公をしたひ
思ふはけんより。何ともすく花の雲は父もなつかしく別して
ふかきやうに思ふ。又此歌は世のしのんぐ。入てふかく思ふ故也。人
能鳥亦能くと東坡の詩に。ある事をひきよせ。能は。いよいよ也
文そへし君がしらぬ花まてをたづね。なからしと山桜の
ことばの花とは花のごとく形ある詞とおめでしい。言葉とい
つるゆへ。さのみや花の縁も有也。詞章似欄衡廿八 白氏 君とは此歌
をさして。給也。それしりから。おんたい切なる物すれば。それ故

かり用ひて。其ねんごろなる心をのべて。君と云也。意は君をしたふて
同じ心也。光孝天皇の親王のは后も御よみ菜賜ひし時 君が
ため春の野に出て若菜つむとよみ給ひしも同じ事也。晋書
杜預傳曰。預曰造舟爲梁則河橋之謂也。及橋成。帝從百僚臨會。舉
觴屬預曰。非君此橋不成。云是預ハ晋武帝の臣なるに君といへ
る也。總じて詩文に吾君とする者を君といへるは類多し。又李白
峩眉山月歌に。峩眉山月半輪秋。影入平羌江水流。夜發清溪向三
峡。思君不見下渝州。と云。君も月をさしていへり。詩格。何應龍
杜鵑詩。君若思歸可便歸。故郷只在錦城西。羅隠鸚鵡詩。韓渥翠禽
詩。何も君の字皆其物をさして云。竹を此君といへる類なり。
つねにしらしる。前のは文の意は。ともに君が詞の花まで山桜の
文をそへて我ひとりきのこる。その詞の花までも。たづねひろきと
也。又山桜ゆへ。君が詞の花の文をそへ出すれば。桜の花のひろき

のどか君が代の花までしも咲てひさしき也

日野大納言家三首に　池辺花

咲花のかげうつす庭の池水は白くとうつる鏡となり

歌のかどりに梅花咲けるを筆をつて花の鏡と被る

はうりかゝるをやくなるしいかん　いせ大 春上　花の鏡にも花の影は

うつれども白くはうつらぬに此花の影はうつりてつんゆる池水の

鏡には花の白もうつりて歌もさしげなきなれば真(まこと)の鏡には

なきとなり

将軍家にて　浦花

風吹ば数をうつそ海士(あま)は住里にも春は花やうつらん

春の浜はいやしきあまも花が花のちるをばをしむゆへ

に風を恨みて花をちらさん也恨むと云に浦見てとちくみ

てあり浦辺の哥に恨むは皆此心なし

花に盛て浮正文蔡花席にて世話し侍　関花を

逢坂は関守も花にいとまあれや人をとゞむる花に海をそし

逢坂の関をまもる関守もいとまありいかにといへば往来(ゆきき)

の人が花にまんをとゞめて通(せきこう)さする故へ関守は関をまも

らずして花にまかせて関を守らする故へいとまある

と関守のいとまあると云は世乃たさ守らんも花のづ

かうこりし也あれやとはいとまありと云儀にていとし

まあれと下知すらんに此春なれや守るの費ましい

つれも也と云筆也　例疲をこめていそぐ立田の山路に

は紅葉の事や関の関守　百　堀川　例　通ふ所ば小田のますゝきを

いとまあれや苗代水をかるに侍せて　勝命法し　新古春上

山家花

山里にこれすうつきをいくせんと八海花をはりつゞきれ

逢見てもありにし物をいつのまになれらひて人の恋しかるらん
続人不知 此哥より思ひ絶けれたるとみゆ。於きの句は
於恋之 去し程の事なるに。此句は今より末の事を思ふならう
ならうとも恐れん。別れてありそして。俗に云。今までしありう
つけたる事也。其気付たる事がくせに如する僻也 人
け分もならうし物をあへずしていさんみん恋や志ぬるらと 続人
右恋一 いう寺 花のすきまの風も恋うつき身ハならいうの物よ
いこそけり 続人不知 於恋巳 山里にも人もさひこぬよ。此比花ゆ人にさ
それたるがならはしに好ていつもさそろし事のやうにせ
しに此ほど花の盛も立てちりゆくば人もとふまじき也さ
あらは此程とられてさびしきをなぐさみしらくせよぬ
さらバ代くせをまずれず人ハこぬしてさびしさを何
しても書しられんをいたさん今までもろさくせず付て

垣まはめいもくなる一きし

関白家歌哥 百首続歌の時 月前花

月影のうすく侍さんみよし照さすハ花よ座じるかひやあらん
さか山の桜の花の盛なるねへさまるさん見えすと照す月影 右続人不知
花よやしとろ 例 歌人そこそもいをすおもむて花よおかり
山賤の営 家隆折續古春 せふどちそこそもいきびれ書ね花の表
かせみぐの営 家隆折續古春よ ひるのとか。夜さん見えまし月の照す申へ。
花をみられバ花よ座じをかきもしかひの也。月
の照さびしてその関よ見えてハあひもなしうべきに見 関白殿
此おま挨拶の人もあし

將軍家よて 花下落

初瀬山桜よ志しむあのへうりをられてゆる 続後拾遺
初瀬山の鐘ハいつも八夜の志しまぬさきにお つき桜の

又れ白き光まてにれの人ハきやく夜の明らむゆへ残ハを
そく鳴やうまぬぞうつるを成くれてねるさらぬへり例がのく
し花の横雲めぐ物て 桜かよ志らむ 三吉野の山 西園寺前太政大臣 玉 春下
清閑寺花百首り 宗尊卿
さびしさ成すぐさむ春れ花盛月比なくてまぬ人のさかりん
閑居なれども花の盛すはきのづらうさびしさもまさるべく
にぎはしく久しく音信ぬ人さへもとひきてめづらしく
思ふゆへにいよいよさびしさ成なぐさむ也。松月ころのとせ
ぬ人のさふ六花ゆへとはいひすがら此人もんるよ閑居なる
このむゆへよ彼よお月さ花をはさしをきて此山中へなる
しそちうしまて慰し也かくみるまて此をねのて
はなはすく才ゆる也んにも付慰し
東山よ住給し比よまれめよ御子花大納言殿おりて

侍ける小かへいでくありきてまうざかりし煙花枝
よほ聲く
侍れえける花れ梢乃桜も風よりさ頃よ又をさらふん
実人よ折てうまん山桜風よりさきにきてもみるべく 大宗
此哥すて数つのる序ときぞみずし桜花風よりさきよ移ね
ぞりせば 俊成 今春 八字白ふ新きの桜うつろひぬ風よりさき
にとふ人も小 式子内親王 新古春下 我盛るす雪ゆへかりそめにみてし便り
縁つうん又字まねて風よちらぬさきにとひ縁へし也此なん
いふ下知のかん也
かへし
大納言数よりけ返哥也
かくてこそみるべかりけれ山桜まされぬ花乃花れ盛にそ
枝何のうすゆへ大納言数をまちもせられぬ下人たはし

ましてや花を見捨しくる身ゆへは何としやせん。抑乃字よね
やうにも捨し也。されどもみすにたゞせしゆへは。如何は
ア花に寄せて送られしが。面白き事なれば字ねて
も又乃字の体節によりてかくのごとし、花にあかをそへて遠
らすを見る人きし。かすを送りまもしを。業報してよみ
給ひし也

蓮阿庵室にて冷泉宰相卿によみ遣はし　花友

昔めし友をさそいし山里を花ゆへ人のなれ慣し春なれ

山居ゆへ昔の友をさそいしに身なれども花ゆへ人もとめ来すれば花のつゞく
人もさひ来て出あひ。あれこれの人になる。又花ゆへ人もとふ
ゆへまでもいとはれぬ也。是れに凝滞せぬ心ちして優寛な
れ不あく

西林寺二品親王家千首に　里花

西林寺。平戸記曰。仁治二年十二月廿七日入道殿御閑眼
ニ云 於西林院。移御喪於雲林院西林寺ニ云 云今案するに此集に
云へ西林院乎西林院ハ大原にある也。述懐抄ニ云西林院僧正
兼覚ハ梨本門主也。云 云兼好集に西林院の文（兼覧親王）すゝく
題をさくりて五月夜深神のまへより庭にて五月夜の
日数をふりて雲ならぬあささればか。按するに西林院文兼覧法
親王梶井二品後醍醐天皇御連枝也。西林寺ハ書写の誤なる
べし

桜咲里をとひくれば待来て待せもとはれまそふ

かなず。されバ離の字也。毎月をふすてむなく夜分のあるをや
わろしといふ。夜がれすと云に同じ。かれすといつは。毎日とふ也。
今ぞしるくらしきものとも人まつ人里独はあれはすまふべう
きり作物正篇ゑ紛久ゑにまし。花さく人あれはざこの里

までも。毎日まちゆく人が。かねて約束して我をを待てもるすき。
花のあるじならでもと云ふ也が。やう云内に為て約束したるある
しれをとふ人と云にまこよりぬんならましし有也。遥見人家花便入
不論貴賤與親疎のんあり
源意法印が詩に。毛見にとかりて作しを聖護院二
品親王にきこしめされて。花かしぞ人ハとひけるはしきれ
ど花をまもらぬハ比興也とりと承し以也事しま
源意が詩人はゆきて。我あくハなひこぬをさへハそ方
ハ花のあるじをおんこゝろまなふんりうしてとひて花
の主ゆへなどふしらハ見えず。比興ハ花のためまへつらくき也
されども花さへ人おれバ何方まても同しやうにこゝふ
かどに比なれハおとりうる人ハ人非し恨於ふ也
本此のりく浅行てちふそも主のなされ花まハとをいまぶ多ややまぁん

又此の敷の花をりてとひまふしも。此哥の詞の花よをようハ
見ゆあるまじきこと也。とひやをはバかりて此縁哥ばは作りるまじ
きにとひやさびもしがましまて作る也
座りて主へを頼て歌をさしりて方よませしもしま

花月鶯

花のちや咲もれらして鶯は来ばふ声ぞ枝ふこりもてる
咲風や春さこさぬとつけ法らん枝まこもれの花をまぶり　拾遺 後春上
あまたとへバまの羽風よちる花を誰におほせてあてら鳴らん　そせい 古今春下
枝まこまでもし花は咲がら咲て。鶯の来ぞとひて鳴るを
が枝まこもれる也。鶯が花の中に鳴ハ鶯が花の中にこもりて
すゆる也。枝まこもる花とハ花が枝まりまぶ。さちぬをと云

花交松

ちかひぬ源山桜や咲ぬらんとかくさ消ぬ松乃むらのれ

深山には松の雪だにきえなくに都は野べの若菜つみけり
読人不知 古春上
桜を雪にみて古哥まで山には松の雪もきえ
ぬと也かく今も又松の雪だにきえぬに松に花咲ける
桜の咲たるが雪と見ゆると也 梅するに代る題林愚
抄に下句さのこは松の雪も消へじと有 今ハ今
又也 ましとは松遅也 将の字也

花如雪

桜花ちりぬれば雪かとめあやまたれて梢に降かゝる
さもこそといはざやうにこそ也 ちもこそハ無てんそのか
さうめ忘れずといふにいふ人のなき 拾遺九 ちるもあてハ雪ハ
の吹れおろしめあかちしろきおほまきの板戸や 桜の白
きが雪に似るをみて 桜花よ 冬の雪に似たるはな也
春の雪ハふるかとされハ 梢に花もるまもなくぞやくきゆる

也今桜の梢にさくとみれば散もやらずちらば春の雪の
ごとく梢にちりかゝりもなくやくきゆる事の花は又
の似たるのみならずやくきゆる事さまでもなく似
たればさやうにやくきゆる事までも春の雪に
よく似たる事也 冬の雪ハ梢に久しく有に 春の
雪のとくやくきゆるに似たるよし 春と云字の注をよく
ひきたてたる一首の趣向をたしなみてあり

源意法師坊にて　寄花述懐

花にそむかれだにや花に老てなくことの又ありなん
花の涙とは つらく泣ぬは涙の文 花に寄物也 血涙と云
も同し 句をさんなし 涙も年ふればかく花にうつ
ろひにたり 古今二 貴之 血乃涙落てぞ流つ白川は君が代まで
の名にあり有けれ そせい 古今 涙の又花は ありしが中

れば身すてゝいせ我の涙は深き神の名をあさみどり
とやいひしかなきも暮 哭血は涙をなかせどもかひなし
夜ひとよなくさめかしておもひくれば、みれも何も
涙のかゝりし衣のいちれ涙すてかんもとけるいうどうな
けばちれ涙とりふ袖ばたとのまかん有けり 詩經衞
思泣血。易屯卦曰、乘馬班如泣血漣如。韓非子曰、卞和得玉璞獻楚
懷王。王以為欺、刖一足。又獻之平王、平王又刖一足。荊王立、和抱其
玉晝夜哭泣、涕盡續以血。此卞和事正篇雜部は、しあまりしは哀
の光のあり。あ花は白も花も有。此哥ハ我の花よんれふり
しそむゆへ、いや老の涙も我の名にうつりかくりしてること
なり。何すても身に深きさびの有て、なげくゆへ紅涙
まなふうぞ花まよせてまへるなり
木寺殿家へ関白殿人々まうでけれは 寄花懷旧

木寺殿。源氏系圖云、康仁親王。後二條院皇子。中務卿。号木寺
南禪寺記云、中書王。後二條院皇孫。前坊王子。即今木寺宮。山
槐記云、治兼二年正月十七日、參仁和寺御室。木寺御所 東宮記云、
康正元十二廿八。為歲末礼參菩提院僧正坊。其後參御室也

木寺殿 中務卿親王
おもひいづるかしらいにしへの花はみれどもこゝろしさぞさし
年ふれどよそひはかはらぬ花なれどあはれと思ふ物かはかれも
家大臣 古春
はあらでさくむかしは花さふ花をそろればいかく
むかしの花しさのふるかよとに花まし人れも物思ひもかしと
いはされぬ也
入道二品親王家五十首哥よ
はまこすこそ八十年れ老をむかしも三ちひの春は花をこそみゑ
老てのつべき命も死せびして、生すゐを浦れなしとい

歟何今七十七歳也此上ぞよひ今健もなくて八十年の老を
むかへしもご年の春の花をこそみめどころの花ことなれさ
アしえて何の益かあんかる浮世にながく終て物ぐるへ此
ものしもさんこそ。ましからめとも也。白氏三十巻春遊詩に我
今六十五走若下坂輪假使得七十猶有五度春此詩をとらるな
んとし詠むしとて残りの春をかぞふれば花と共にもちる
涙かな 俊成 令春 七十の春をまちえてかぞふしも今年は花の名を
こそみめ 実空弘長 百首 川合のんかしし
将軍家にて 寄花懐旧
八十まで身は長生をすてゝいつくにもみし世は花そおもひかね
我身は長れすてゝ八十年までながらへぬれど代は君がかく
ことにて年ふる列に花の本もいつか老木になりて栢梨えて
て若木に成りけりふるまもとこころし 青の春

を思ひ分れいつ迄はなかしたる事なきをも總
なるまでもしせしも有るべし 春は花也。年々歳々花相同歳々
年々人不同此詩のこゝろなれ也。翻案してよめるなるへし……
梅花宜風坊北新栽処仁寿殿西曲宴時。人是同人梅異樹。知花独
笑我多悲 菅家後集十三此詩よくよく似たり
花に比後前入た時秀許よりや送給し
部類云。五位源時秀加地備前守左衛門尉時綱男新拾遺作
者
昔やまさか楽し紅の花盛こそもと無春乃老ぬらんを
後前の国今ま来ては何かの事は付て紅のこころまさくまず
て年くなをえんとも紅の花盛をさむして老を老ひぬ老の
内をさひ雨のゆりしへこそ待れしも也花もしもと云ま。
花は列しし。此所はしらこてゆしこそよもなし列て花

を見し事をも忘れずなげきすまし。我何てさらにめでおもひい
らしてみれどもかひなきまゝに叶ふ友もなく花も我の
やうにもなくして。たゞ我の春のみゆうしきことゝ也

返し

古人の友を忘れずといひしも友を忘れぬ志こゝろを
其當時にも。故人の春の花をさへおもひ給ふ心ざしぞは其人々よ
て。我友を志ひ入て。其うちいなきすていかにさびしからん花なきも
しのび給ふなん。いつも我へより給ひて。同じ所にして花を詠
ともしけにみえしやと。吟書かふみの中をおもひしのび
老ては。昔の友もなくして。一入ゆかしくおもひ給ふぞと
也

此花見侍時。故ともに入て。おもひかね其しのぶ哥
書侍る擬硯を。将軍家よ奉りし時に紙に

なかく衰とはみるは七十の春をかさね給ひし我身の我を
今より後我死後までも此硯を用ひ給ふ時ハ我七十の
春をかさねて花よんで忍ひして哥などもよみ給ひし名残をと
おもひ出てしのびつゝかたらひしと也

同返し

七十年の春我ならでいつの花にも巣の花やなをとゞめん
七十年の春をかさねて此硯にて哥をよみし事なれ
ばいつまでもりの功にて侍らんそれの詞の花のなをとゞ
めんことをかりて侍れどかめてのこしまへり

見花

まれくの月こそあらめ老てこそ花も涙に霞む春哉
老ては涙にうきゆへまづくの月も一つすむ世。月をもおもひ
まぞくるなれば春の有盛し花にも移らふとおもふ

このきは老のくせとして。花をみるにさへも。なみだもろくほされ
て涙にかすみ侍る也　小寒食舟中作　春水船如天上坐　老年花
似霧中看　杜七言律　感時花濺涙　恨別鳥驚心　春望　同五言律
本寺殿家へ関白殿にまうりける時　花如雪
吹まよふ嵐風にぞきゆる日影さす庭に花乃白雪
花のちりゆくは日影にいつれなく流ざやかしくうつろふも風にふかれ吹
ちらすゆゑ。雪のきゆるやう也　例胡月影白くなる山の桜花はちれ
なくきえぬ雪かとぞみる　有家　新古春　春日野の下もえわたる
るる草のうへにつれなくきえぬ春の淡雪　国信　新古春
古集。五言詩。一句說まく。百首哥讀しに
花発風雨多
此哥新續古今に。誰とも入り此集に同し。一本発の字
を散とするは誤也　勧君金屈卮　満酌不須辞　花発多風雨　人

生足別離　干武陵　唐詩訓解六
世中はあくとそありけれ花散し山風吹く春のなぞ　家隆
世中はかくこそ有けれ吹風のめにみえぬ人も恋しかりけり　古今恋一
世乃中の事は何につけ。かくはかなけれどこそ有なれ
まへさへもなきに花散とくは。山風あしくふきて。春哉もくれて
さまりをなす也。寸善尺魔といふ事ありて人々いふ事也
基任园播国に下向し侍。法性寺山荘の花の陰にて人々く
十首哥よみ侍しに
散までは。すぐめし物を山桜ちらしやと思人やなからん
基任。在花の陰。此花を友として咲初るより。散までは誦
こらしいますまで。花守人もあるまじきれば。恣さうして
悔ん事は名残を思ひてかしむ也　折しらねばたわげに
も有か桜花いざ身備て散までいらん　新古春上　年に一

夜さます君まては花かすみ人もあるじしらずぞらふ　伊勢式

詞なしとの歌

梶井二品親王家三首に　庭落花

梢より落るよ向ふで桜花散しく庭に嵐吹なり

庭の花をなさむるに嵐の吹て梢にある花をさそひ

ちりしきたる庭に又梢にもさだめず庭にもさだめず外へ嵐

のさそひ行也。さて落る花も嵐と行と給ふ也

後宇多院宰相典侍歌合に　惜落花

風ふくに落てはまたやまず散花はしたふおもひかるを渡るさくらん

花のためならば落るさ風にさくらんだやすく落てたれて散

なるらしは年比月比おもひをますせてめづる我今散をし

ふかくは志ぐさがひやすかるべきにさもなくてまばらし

てれ。おどろきかるん志づごにちまれかしぷりくれたる

まつけてれぬるにも侍る也

落花

いづくにはかる雲くれく風吹ば雲ぞさゆる花乃志ら雲

落花なれば木の下ぞとかどこもなくしも花をゞべ

きにいづくも花ふん風にふかれて行方の志らぬを。

雲にさかゆるしこまあり花を雲に見えて出まれ

しこまありふりくれてむる也

糸ゞ落花

志賀の志るらのゆふ花もちる川まで桜ちりかかる志賀の浦なせ

浪の志ろさを白ゆふ花し也。山高み白ゆふ花に落

鏡たきの河内に見るにあかねども　六百番　逢坂を打

てみれば道のべの海白ゆふ花に浪ぞちりける　續人今和　新拾遺

浪の白ゆふ花も桜花も、ひとつに浦風にちりしかれし

もゐぢりかふハ。ゆきかふてと云類ふして。ちりちがふもあり
春の曙にゐるなつまんさうし拙をちりかふ花まれへまづ
ひぬ 貫之 古今春下 桜花散りかひくもれ老らくのこんといふなる道
まがふがに 業平 古賀

御子左入道大納言為家花園にして哥よまれし歌

海邊花

海士の住磯山桜ちる時はあまのみつけ衣袖白ふらし
磯べの山に咲を。磯山桜といへり 創 あまの底のたきぎ
志かやさいしまあれやいそ山桜かざすあま人 月清 浪
けふハ浪よぬらしあまの衣也。此哥ハ花の浪のかゝる
衣也。それゆへ袖の白ふしとよめり、

梶井二品親王家まく 落花

桜花梢よ花ちる雪ちるかくぬるとも花の色はわたる波そまし
桜花の雪とふるとも雪のごとくに梢はちりそおく
ばさのこ志ぬれてぬれしむすじふに梢ちる花のかげ
ちりゆく。ふかくちしむ也

入道二品親王家五十首哥よ

雲とさえ雲と縁りて吹風のうさをもしらぬ山桜かな
梢さくいゝ雲のやうまもみえ。又木陰よハ雪のやうに縁り
て面白かりけれど。吹風のうき事をもしらず詠る也 例 雪あつて
花ちる峯の鄙か山梢よや風のうさもしられん 続古春下 正親町院
みやまん片おのみのく桜かり花の雪ちる春の曙かの 古春下 後成 新
川へ入るへし何も落花の面白さをなしてこ奇也 拖束
世界よ曼陀羅花のふるんをみてみるへし曼陀羅花ハ
適意花とみり此花みる者身心適悦遂情をますといふ。うさ
まもあらぬといへるぞのづらしわけあり

花哥　中らく

春毎に今をはくさひ咲花の日かずにあまる三芳野の奥　折く

日数にあまるとは。毎日〳〵入てみるに。三月の日数ハ尽ても花
ハなほ尽せぬを日数にあまるといへり。花ハなほ尽あまれ
ども春の尽るゆへ吉野山の花の花までハなほ尽さぬ也。毎
年の春。かくのごとく也花のたかく山のたかくもかゝる事なとよ
みて。たかくまでみえてさぬ事をおもひたほしむる也

纒浪浪京来結し体　谷花

此そふあおくさもみへてせ谷川の岩をさせそゝ花そ散しく　家隆

並　むびぬれど身をとらき草のねをきとも一しほこふ水わくはいるん
こそ思ふ小町　新むすぶ石ままをせぞゝたかく山の岩清水ある
今もまさり人丸新下谷川よちる花なれどあのさそひゆくつき
に岩ままのせたなふまで花の数かさなりて流れねはあかいなが

れてもわかあらすぬゆへあのさそくねやう也。本哥は岩まの
せはき也。此哥にてハ岩まのせをさかしきまい花のたほく
散つもりしる也。行水を谷せばみ岑まですぢくら玉のつた
えんとしゝも我やなりたし有。せきとめのん也。これも谷のせ
ばきかしきすてきびこうてこねまでもぞくられそくへしる也。
みづのたほく流りしる也

此子を入道大納言為家かりして哥よま給し体

樵花哥

此春ハ月まで山路の樵ねしてうへまで花の数をみるかな　家持

夏之右春下　宵の夜の此山路に樵ねしてハ岩花もみえず。
杂さもして春の山ゑにねて夜は夢の内にも花ぞ散る
夢乃おもくれもそれしが此春の樵ねすれ月乃比樵ねするゝ
ゆへかへまずく花の数をみる也。本哥ハまことの夢の中

にハ花のちるハうるとあるをしハ月にかゝる人ハうたに花の
散をみつゝしまゝて前方月のかきやみに臨ける
時ハ花の散も夢のやう也しといふ心をいひ出してこ
めてよめる也さて夢の中に散つるより現にみるは
一入わびしさもある也うつゝハ今現在の後也
花は此木幡殿へ参りて侍し後聖護院宮より被仰
侍し
木幡里宇治の北伏見の東。木幡殿康安二年春の此ハ木
幡に住給て哥合しけるに。花かくるゝ人さへ家路をハ
で山さくらこゝろしハ花の散るにぞしるゝ二品法親王覚誉
題にて聖護院宮と有も覚誉は親王也。木幡にて
哥合の事正平年中春に有之
我為しらふかくる山里は花より後と人のしらかし

花の時ハ花の人ならふ也花さかさる時は人の尋んため
にもふされば此山里の花よりほかも尋ぬへしと也
とふまでもと花やはあすぬ文こん人陶か歌に又霜しとありて
花もんありて訪人のとふまでもとちりしてはつらん。
訪人の陶て後ハ雲のごとくふる也　時の今日なれぬらん人の
んたをいハ花のちりなるん後そてゐるへき　隆信朝臣　前の哥のつけ哥
寂香
まり也るる歌
流辺し
野行の老哥をなすもうそ
花散て村しそとわめ侘ひしき我身をきてし春の山里
まゐりて花をみるたにつけてハ老にさびしくうき人をし事
をゐにさびをさこし事なれは花の陰ハかすに不及。花
散て後ハいよくとひなるべきしやふ也

みし顔ともや散初し花なれば詠むるに雪しふぞはなん
詠る中にも散初し花なれば侮りて後は雪乃おもしろく
つりつんさてはうりたる雪はふるも詠もなりけるにさび
しう人さしとも也
て
霊山(りやうぜん)に住侍し比御子左大納言于時中乃花散りし後詠侍し

霊山 拾芥抄云霊山釋迦在清水北法観寺東見聞随身抄云
元慶八年甲辰建霊山寺八雲御抄云鷲峯山(りやうじゆせん)八霊山也

花も葉になり果たる後を見おくるにさらばと詠し花の桜を
花のさかりはともんと詠し桜するをこそる事は有て盛には
見る人すべて花は散て葉の後まで見る事なさて侍り
かれき事なりしさびしき也心付事に心をこめてみる花
しも待りおほきへのふくらめる也又花の盛なる比来て見

しごとに待ちかれけらば来て見るべきにさもなくて
今まで葉をも見る事よくぞ待りけるよ…
心し…
花盛しらぬ待さぞ見る雪の…を添えて
花盛には必ず尋ねたる寺づさかしに詠しにとひたりしま
さぬいはいかばかりはしくらひしかとも日花の雪をふぶるぞ
たづねせしを語りそては花盛にたづねせざりしもさらめて
世のさかり有しかんど花の散るまでたづねせしとそて
いよしくたんざしのあさゆへたれとぞひてかの待るさ
も忘れてうれしく侍る也

残花

散ぬとて侮る山路に立雲はとつさけなく待る
たく山まろる花のちりぬるとて侮る山路に

へだゝりし後まじと又さけり採りて有也
将軍家にて　春月を
月かげはくもりをさへてもぼみかし春を老の涙に曇る夜すがら
野つもせじくもりもさへてぬ春の月は勝月夜にしくものぞなき
千里古
春上　むかしは霞むばかりくもりまでは見えざりし
まじとへ老の涙にてくもりゆく。霞むばかりなる也。昔は春
きをしふ也。月をどんなまも。昔をしふゆへに涙の落るが也
和哥所にて人々に同じ心を詠ませ
きのはるをしむし。ばかりみる月や老は涙の暗きならん
春はもろしに自然とかすむばかりは老の涙のひまなれば
也。涙の落る時はかりえてく月影の清さかはあらぬ也
小野社になれ居してへのすくめ結し哥す
東雲雀

霜枯し浦ぞすすき原まで神て手すむ春日に東雲雀也之
ひさぎおふる沢は浅茅のちりくる人にそれひかれ庭てあくらねよ
けり好忠　詞冬　霜かれし茅原も萌て室も手すし時分の春の
目にびたつ。それまでありし浮節ひかやるものなくれるなる也
入道二品親王家五十首哥よ　雑
月は程みて山の雲路は住む野のあやなの原に雉子鳴なり
室はまじ嶋をうれねば。山がたれど。安楽なるゆへ月の誘へ
片岩の胡原よ。雉子の鳴しき。げにさある事よ結る
也。片岩の内は胡原也。古称也。名所なるかゆへ月の待るとおもへ
ゆへ。鳴の時はなれんずも少くめなり。又片まは方れんをと云
けたる体も有歌
二條宰相雅経よ哥よまれし時　山躑躅
一本よ此詞書を除して題へなり也

ときハ山秋ハみどりし花ハ河にかゝる岩つゝじ
秋くれど色もかはらぬときハ山よその紅葉を風ぞかしける　古今賀
おもひいづるときハの山の岩つゝじいはねばこそあれこひしきものを　古今恋一
しかれバ常盤山ハ山城之秋も染ぬ事をよみ来れり。秋ハあかく
の紅葉ハさかりなるに。ときハ山ハ岩つゝじの咲ゆへ。秋の色にい
づる也

一本に関白殿に歌をさゝげて百首歌よませられし
に款冬　影うつれぞすゞしき井手の山吹の花ぞや。かくる井
ゐは志がらみと有此歌の心ハ本歌。山川に風のかけたるしがら
みハながれもあへぬ紅葉なりけり　秋下 列樹 古　花の影ハ氷るも
ながれぬを織の影のながれぬやうにみえて井手の玉川
の志がらみハ。山吹の花のためにかけたるゆへ。影がながれぬ
しや。又説。本歌の心にぬて影をみれども花ハながれ
ぬやうなる紅葉をしがらみとみるやうに。山吹の
花が則しがらみ也。花よりもかくるといふ。花までやかけしと
るしがらみなる也。前説ハ。山吹のためのしがらみなれバ
依主釈也。後説ハ。山吹をしがらみと成葉ありゆへ持
業釈也。此釈の事。正篇山雪に出
入道二品親王家五十首歌に　款冬
ふみわけて誰が来てみん古里ハむぐらも八重の山吹の花
葎ハ荒したる所に生ずる物也。是ハ人もあさき庭なれども
春は八重咲もさかりなり　貫之勅 春下　今さらにとふべき人
もおもほえず八重葎して門させりてへ　読人不知 古雑　八重葎
しげれる宿のさびしさに人こそみえね秋ハきにけり　恵慶 拾秋
古ぬる里に。山吹ハさき出れども葎の八重に茂りしかれ
ハ誰がふみわけてみる人もあらじ也。山吹も八重に咲ゆへ。

藤も八重にさけり

不断光寺にて藤花を

むらさき花れすで一すじれ花の色もふかく末にゆきされ春乃藤浪

紫の一本ゆゑにむさしのゝ草ハみながらあはれとぞ見る　伊勢物語

なづらふ本あまさにかぬれバそのむかのうれげなす

伊勢物古今也　藤ハ一本なれども。あまさこすさまを廣ごりする

藤岸ハ浪といはんため也

れすしあてろを一

立帰る春すぐくに藤の花何ぞは波の名に咲らん

春なるなくまとハ春にあらなくに也春すておかされ也。

瀞水に出より何ぞはなんぞ也ハの字助字也正篇第春に

出より浪のごとく春ハちるも出しらぬに藤の花ハなんぞ波の

名に咲らん也浪の名ハ去りし藤ハ紫也浪の名しらん人々の名

の字不審也白藤まても有ましたゞ此名の字ハそれ

き。色やうをかけていふとみるべし。悔くみる人し

藤の花うはらふかげハ池水の底より浪のたつとぞいふ

浪ハ水のうへにこそ立。影をみれバ水中波の

立やうなる也

春欲暮

數花乃袖を惜しすぐさむるほどにや春は猶のこるらん

春のくれ尽しなば花の別れし。なをしく。くんし。春の行

る内は花はちりても。まだ春あるかくらいづ方にても花

なば花も有べきしるふよまりて花の別を惜しみなぐさ

むるかどくてや春のまだ残るらんと也。此詞は。あかさて云る也。

春も久しく残る事ハ叶はぬ事なれば。惜しの名とよ

める也。花の別。正篇第春にあげさし。正篇の月なし

後光明照院関白殿にて　暮春

花の外は散らむ後なく散はてむうき春残る花別也

花は散る陰もなく〳〵散りてしまへばとの何の

かひなく。うき春なれども。名残をまじはらむ世也

む陰なく　侘人のよそにて見る木のもとは散らむ陰なく

花に葉散り　通勝右　秋下　うき春　秋のけてふるに、木の

葉いく返りうき春の名残をゆかし　一松名所下

浦暮春　平常　春浦

浪もしらやかすみきりくる浦舟の行末をあらはしてくる春の

ゆくへを見送る舟人かへりきたえ行ゑもしらぬ夜の小舟　好忠　古点

出され　こめて春の行末もしらぬすに漕し桜もうつろひぬなり　古今

本歌はかへるをたへんそれ行末もしらず。此歌は霞の中にゆく舟の

行末もしらず也。さて浦舟の行末もしらず又暮行春の行

末もしらぬ也。しれ字。此方をとりてかへる詞也。これを続く

入道二品親王家五十首歌に

行春の帰る雲路にをくれぬる名残はしやむとはあるかな

かくてぞ花をとめて。帰るをきらふやみ。霞をあはれみ。雲路をあふ

しむ　古席　帰る花の残の名をもをくれねばこそ山し

きは秋のよれ月　為家　秋別　花は梢に帰る古巣に帰る也春す

しまりをしらん人そしるべき　宗清

鳥入雲　朗詠　新路如今穿宿雪　旧巣為後属春雲

留春不用関城固　花落随風　朗詠　春の帰る行

雲路にも花もなくもねば名残をとどめやむしさへども帰ひあるき

をしむ也。鳥の古巣に帰るを雲にへとぞい

三月尽

いかに暮れりとも去ぬ春頃の二たびも帰らぬ花の

夏とはものが名付ける事なりんこぬとぞたゞに夏なれ
ふりやふ
古衣に別しと云へば此所をさしてほかへ行也されどもの
別へはきさりて来るまでも所もその前の夏もるに春へは
ず前ふわけらるさらねを別るゝはものが名付する事ぞとも
春をへふしるふまて三月をのる也

續草庵和歌集家求諺解

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平長新訂正

夏

前関白殿 近衛 三首哥よ　夏夜

花染の袂を今朝はぬぎかへて春のかたみを手向衣は
夏衣花の袂にぬぎかへて春のかたみもとまらざりけり　大江匡房　千文
自房の哥に似たり。古今集には世ぬ物なれば自然に花もあ
るべし此論前に出せり　かゝる錦枝に一もとおれるは秋の紅葉
をたゝぬなるべし　遍昭　此本所にて　かゝる錦秋の紅葉やちぎ
田山紅葉あへぬ枝に風吹也　文円　紅葉をたつは新の字也春
の紅葉をたち切て紅葉の縫たる也。衣を新しと云ゆへ也。花染
の袂は春の紅葉なるに四月朔日よりぬぎかへて。夜の衣に

是ハ今三座丸申候用事ニ候間御渡候
此方未熟候得共宜敷御頼申候

乃之[illegible]右之[illegible]
猶又[illegible]

なる由ハ春の数に数へぬれバ、たち切て無成する也。春をたちしむ
に数ならん花衣さへさきとよふ事也
弥生ても春を二度晴の日にある花ぞめの袖の別に
袖の別 白妙の袖の別を加へして荒はの浜にやどりする
かな 万十一 白妙の袖の別ハおしけれど思乱てゆるしつる哉 十二
此哥ハ春のたつ日にハ春をおしみしに、ただ今日又花染の衣を
ぬぎかへぬれバ、又袖の別のおしきよし、故に春に別くやうに
思れて此ことゝかし、春を二度おしむぞと也

慈好暮りて再積結しに寄餘花

春の後又ぞしたひける数ともえておりくさ山に待る人を
ちりとこそかてあまくき桜を挿花として白の袖にとまれる 古春
春の内も花いおらぬ程にごとく色数すくしとんてを
つきる事なれよ春ハ已去て後に夏山の餘花までおしき 又

おしてとふは、ぞくに挑ん深き事とよし也。云人ハ自身花を大事にむ
といひつし、下の心ハ慈好の花をせめて挑人なく殊勝の儀
と感したる也

葵

萌し春の二葉乃そのままに其も老けぬ葵草かな
をそくさくをのがさましく咲花もひとつ二葉の春の若草 秋春上
とまめるも春の若草の萌る頃ハ、皆二葉にて、後ハそまつ
きほひける折也。去るに葵ハ春の二葉のままにて、夏も老けると
いふ事もなく、いつまでも二葉也。去るかざしにもいへり。二葉
草ともいへり。此二葉なるハ俗にいふ加茂葵也。いにしへハ
その神山の葵草年ハ経れども二葉なりけん 拾遺 折衣 賀茂祭
咲葵さまくありそれ〳〵に根をきまへる庭し

卯花

夏衣またき袖しより白妙の夕暮そ咲る垣の卯花
たゝさ云も夕し云も衣のえんの詞也 袖しも濡らし因
しきなれあれぞ。衣の縁の詞也。夏衣をきたちぬひて
云うたり。白衣なれば そのえんふかく夏衣の月より。卯花
も白き色に咲く袖らし也。卯花ハ袖夜の比なれば。夏衣の
月より咲らしと云り

入道二品親王家五十首歌に

卯花のまがきの名のみ明ずして今よりいそぐ夜半の短さ

卯花の咲る垣ねに会せずね明ぬに明ぬし夜をながれ夕り
言之於 花のさき夏の夜は短に。卯花の白き中に夜も
へやく明るになりてと。とかくはいしくて夜がをなく。おぼゆ
る也。まうきめ卯花のにほふ夕まと云詞なき也

侍郎公

年毎に待れし一声ひかりすしまして袖をいそがぬ郭公

郭公を待に其そくばまりて云くば。毎年人々待事が
常なりしにせに物たゝ行人郭公をさぞく待けく物しなすべ
いつもりて袖をいそがずと鳴也。ことゞそ
郭公もやくもまけかしと待ものはめきてて云へば
なくやく宝りてなくしひに物ふしをなしもてきてい
ありつねくいたんにてあめ也

入道二品親王家五十首歌に

花をちさきをあはれとおもふしや咲かる老ぬる身わの稀を惜しん
老の命のさえやかびそもしきふる事を命をも花わるさい
つり。郭公をまてとももく花をなく惜むさぞ然そよみ
たりは花さきて老の身のたのむべかりしに花をそく咲し初もん
これまとまくやの老の身の何の用もなく命花を惜む。

ながしくてかゝうさまも入あれきんおあにぞそくゆ字く
しゝせ
待子ん
涼もいづるをまてしるてを移くてあれあゝぬ身よ春を惜しん
此君久しくまてどもあゝぬはいつれ日をさしてしその日
暮んをまてといふんにて物事をたしむずし未の身へおあ
寸をまあゝねばいつまでとはまされねまだやくなりけり
こゝ地剛 今ハ又およす あゝし ぬ身もなげられず此世にれむ契
あゝねは 兵助親王 後京意
後京きうきゝ玉ふハあさきじ涼島待しとあく物事前くずれハ
此哥下の句よりよみなかへしてみるべし涼島を給と
あゝそてもまたまつ ゆふくれば涼まうちもいふかべき
待しあゝそゝわそ物事をならぬすもおくねばんらの

年ふてするゆへばれあきもぞまさしとは思ひるなきにあらず也
涼前のいうよしと思ひて待べき也されども流意のそのまゝ
れよさんをまてつれるをかうしき待まるゆへあけりを
あふかへこうりる也
聖護院二品親王家にて 郭公
まよひするものびいきてしゝ涼くる月も雲居の村雨乃そ
村雨のそれくうるすの雲すに月のおりしそゝは面白き景
色なればとくへ涼もつまも物事を思ひハあてまじ必
思ふべき也此君ハ思ずしてこうしくかんせ此事よ増すして
にえこうくまずしし也君ハあそるとも涼れうくつめて
なるね後
前関白殿 連歌にて 待郭公
一声ハ後をまたれよ涼きまれもよかゝゝぬ思ひ成らく

かさらふハ語る夜ぞえ。鳴事也。あれよかさらえしいへば
はやたまし。も鳴やらやうあれども。奈よ兆萬てうたさに
云うる也。たしく初音は。たまし鳴うしひそ。いまず
鳴ずとも。若十声鳴て。千夜二声めぐまれよ。一声
鳴ぬは。まさて待よりき語よ。一

入道二品親王家五十首に

郭公よりさ雲にとぬ今宵は月に又やまちかん

ほとゝぎす待人のさよふける雲に入日の月は照あらそ一万
さまの名の字もて。おめて云詞也。たち雲は。雲のきこえてと
云に同じ。雲のきこえて。往中折に残し。傍し立たれ。
雄のものしくおもしろく。涼鳥の語れなぐさ雲
ま入日はさしたる宵に一声鳴てるはされべし夜の月
のおもはれハ思はれて鳴くべき語とは。又鳴てすべし也

将軍家三首に　夜郭公

風氣は声まよふ沖の雲ゆ声ある浪涼鳥は
声まよふ波も初音の涼か。たましく鳴とハ月は
雲まより光まよふに光きよわ。涼く方初音をきる。
雲まより立して面白風景也

等持院贈左大臣家にて　涼き夜の時鳥

忘めて詩人は二きけし涼鳥源てやすし秋をまつらん
涼鳥もきこえて鳴き貴賤に世にあるべし。忘れハ大宮
に詩人ハ宵ばかりにて宵ていねるもしあべし。左頼に耽
んまさ人のため鳴て給もきかれず宵ハ鳴ず夜
をしうて挑ん深くて宵るまでも忘て詩人のために源て
こそ。かひもあれべき人ばかりきけしと世ふんにて涼夜に
及て初音をきかんとするなくしき也

二條入道大納言家三首よ

郭公志づしかでへ月おゝて出ぞし一声ときかれやハせし

ほとゝぎすの一声鳴を待て。二声も三声もきけば我は唯て待しも。一声計とハせつ手ぱく声もきくべきにもそこそ待つるにだゞ一声きしいふなき事をいふ也

基任周懐圓よ待しよ文月五日尋ぐふりて哥よみ侍しよ菖蒲

と有又あやめを添(そへ)て結(むすび)ハ同じかり様ハ菜の根よ草の枕といふも同じ事なるに。こまひハ五月五日なるば。おやめをそへて。草の枕を結ぶ也。おやめ枕正菖蒲の事まの枕ハ。兼根なる事をを云又草を結び合せて。枕となる事も有。正篇秋旅沢に出代哥よてハ。草を結ひて枕とするゆへ。おやめをそへて。枕よ結ぶ也。かりねハかりそめにねる儀也。おやめを刈ゆへ。かりねとそへて云り

入道二品親王家五十首哥よ　早苗

遠近の河そひ小田よ取わせて早苗之也守治れ里人

河そひ小田ハ川よそふて有川ぎはの田也傍の字也(側)御あちこちの川そひ小田のあぜつゝひ下のめぐりをもして又村里ハ後淡路大日集当本川そひ柳のかききらしなびく水うけ来雄本とあるも同じ事也遠近の汀れ流ハ乗ろうとも方後ふきかよへこられ川から月哥何も守治よ擲み羽共也。おすこと各たの川べ小田よ。舟さしよせて早苗とる体也

河五月雨

列とめて海も限らぬ水まはるひのくり川の五月雨のころ

さゝのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ其まをもみん　古今大歌
所歌に此歌をとれる歌は。五月雨に。ひのくま川の水
まさりて。駒とめて。ほりもやらんぞなくせんと見へ合せ
てみる作也

前中納言敦なく　五月雨

舟とめふねふね五月雨は水かさぞ海さる丹生の河浪
此は人の歌来流すて丹生の川ことかよへど舟はかよはず人
ふかし新千載に舟はかよはずと有るを。五月雨に水かさ
まさりゆく舟もかよふばかりになれると也。水かさは水の
かさなりて深く。深く水深也丹生は伊勢也。正篇月
まで出すノ

入道二品親王家五十首歌に

山河の水のみかさはいとゞまさげ波の下すやさみだれの比

みなみだれさとめり　玉かづらさやくゆふされね山菱は
ひろぶれてこひつゝあらん　萬葉十一　いまさいまぞ思ひやすむさはち
の松の雨つゝて意ほくあらん　萬葉十六　あなかなばみむろの山の岩小菱
まひは我ひかさゝひゝかり　萬葉十　あまの岩菅をこすといひけり。
あまかされ岩をこすゆく菱が波のたつこに成て下に移りけりつ
くり千頃桑麻在船底空餘石髪挂魚衣（慈湖峡阻風　東坡）五月雨に
移りくと云事をこめてよめり　題　水まさるをちかへりけるさらひ
子がうらふれ髪の五月雨の比　ことつね　引うちまくて尋見かねぬ
る夜しるかの川の糸のさゝふれのえ　源宗吉　勅撰

五月雨久しといふことを

こゝ幾日しめふりぐまどり五月雨ゆへぞをしれ流るべし
春日野の若むらさきのすり衣しのぶの乱れかぎり志られず　伊勢物語五
月雨を知らし古にいふゆへ志のぶの乱れ知らしと。五月雨にいひかけ

たる也さて五月雨の日数を経てかさなりもたらず降くらす
すとよめり
五月雨のそれならぬ比二条中納言家より
なべて降こめられしぞくは久月雨は晴るにこそ待くらされ
あそずして日数を経ても晴もせぬかとの中すなれば降
つゞしくも晴せずはさもあるべきとさるべけれどもかの高
あがではえぞあるまじ。ねん比する中なれば晴るなしと
こも雨をとふのぞてもとへりしとも也。尋しのしは助字也
ぞし
私 五月雨にぬるともこひむ我袖をふるさぬまつらんと思く
秋といへばよそにぞ聞しあだ人の我をふるせる名にこそ有
けれ 古恋五 読人不知 鶯のこぞのやどりのふるすとや我には人のつれな
かるらん 古誹 読人不知 萩が花ちるらんをのゝ露霜にぬるともまこ

んさよはふくとも 万我袖をぬらすれんわすらずば。袖をぬれん
なるゆへ。五月雨にぬるとも。とひまつらすべき也。ぬらすと
いふは袖てやくまたぬ袖とえらする縁也。雨の縁よ
ふらすといへり我をよにいは我をさへ数ならぬ私を
さへふるしめはぬれんなれば也
又月雨晴
根あれど衣ほさるゝ又月雨は晴るなる天のかぐ山
私 春すぎて夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山 持統天皇 新古夏
根あれどもほさぬまへ。宵のあればいへ。西篇窓下曉窓す出。久し
く降五月雨も。つゐまへ根の有てほふを晴るなれば香久
山よ衣ほすらし也。此本家根本万葉よあれども。略
衣さらせりほ衣かはそりとぞいふすゝなりて。ほすてふ。殊よ
誠めかれしゆへ。そのまゝにとりてすめるに

一本　近衛大輔家にて。早苗とる里に秀歌を詠ん。水漂
みどり田のさなへとりぞうゑぬる。哥の心は夏を詠
早苗とる也。されども此比ハとる里に秀歌を詠んぞ
いはまじくのごとく此田のけふて。さなへをうゑ
るがごとし也

野の萋草

岩代の野中に松の下草もむすぶなりに出づる比か
岩代の浜松が枝を引結びまさきくあらば又かへりみん
岩代の野中にたてる結松心もとけずむかしおもへば
是は萬葉に有りけれども此歌の人を結ぶ方に見えければ人丸
此故事に皆篇廣に出家の萋草くぶるさきゆくに
かりまむすびてかゝく事をとありて。岩代の結松の
まで松の下草も萌りまて結ぶ方に成しけると也此方

稲のことも也。岩代紀州也

等持院贈左大臣家三首の　萋草

かりよこむ人ぞ見えぬ深草此里乃名もしたがふ思ふる時や
年まを経て住こし里を出ていなばいとゞ深草野とや成なん
是は伊勢物語に男住わびて出て行かんとする時に女の
さんよめる深草を云名も是にて深草の深く荒りたる故に
なれば伊勢物語よりこん人ともなき也。又刈よくる人もみえ
ぬゆへ。へ萋の荒る也。本哥伊勢に待し哥説也。此哥まで
いぶ伊勢に入れたりけてしまひ也

瞿麦

こゝろ川のひとつ川草なでしこれバ名これ花咲まもし
みどりなるひとつ草とぞ春はえんし秋ハ色々の花ぞ有
なる古今秋上　本哥ハ。春ハ只一草の一根よみどりなると

いつかとぞ此哥はへまかきにはとゝまりひとつすて秋の草は
ましらぬなれどもぞすくんを付てみれば花は紅白黒の色
かもごゝも露さもみていろ〳〵の花の咲也。面白き也（紅白黒紫黄）

沈亭澤弁許みる　籬間雀麦（まがきの）

庭どりしておほも枕とむ夕暮に咲や籬れ山とすぞしと
（本）夕暮れすがきは山とみえてすん夜はとみえども寿もとなべく　遍照
夕暮はまがきにさくすてしこの面白かれし此ゆゑ庭どりて
あすもらんと也。すがきの山とうけてすがきの山とこえゆゑ
へ。まかへこゝえられぬれどれ。おもにやどりてみえんとまあり

光政か許まて葉月を

葉山の木のま（このま）ぬがくれ月かげはおくふを雲はいづくともなく
（本）夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらん
（古）夜未のすゑをおそてぬれたればこそ。雲のいづこにかゝる

らんともみるべきなれ。夜山の木のまよりする月の影をと
出やらぬ月よ。とも入れたれば。まへのいづこにやどるらんともみ
る也。残絶本のまゝにてかきつる也　暁月暫飛千樹裏　石邑山

韓湖三体
詩絶

浦葉月

葉月夜は月の出塩にひく様にてすてそぬかに浦波
月のおしがは月のおちは必塩の満る数よ云り　前くよおさ
りゆ浮月の出かやみちぬれんすゝの浦路よふそると
満る後出竹月のでしかのみちくるに川な月よこその明ると
まみて月のえゆくめる事をいへり

前関白殿まそかな鶏

あされへたくなれ鶏小おしすくにむにやくはなよ花
あくなく、よ見なし云様也　あまの侶の志るべ

あらなくにわんしのこ人のいふん 小町古く 恋四 ぬるのたらくくは
ゆへ天の戸のかるうしといへば天の戸をとわ説のたくいゝとも
らぬまで比へ宿の坐やく明る也戸と云にしせて也天の戸
いへ天と云ゆすで也三篇暁鐘仏ま出
関白殿續百首り　照村
葛草の露ふ衣きらぬれたとりしにあく湯文塚のく原
まに川の山の雫に妹待しとれ立ぬれぬ山の雫に 大伴皇子 玉恋二 は
ゝるま秋行へ片居の森の雫に立やぬれまし 法成寺 続古今 例 八
湯くり月数まられて夜草の露ふ衣秋風を更 内大臣績 秋旅 文
塚昔にさりしすらしそ露を今ら衣のぬれてちそて居る
まにれとすく夜の明る也
前関白殿 幸 水れはいはい 三首よ 常
岩いまつ影もとみて岩はしふ水のまじくなくみ常のゆれ

もひせく心の内の影かわや蔭とへ見れども 二二条 西 上
影はすの中にゆとさ所有てふをすぎ我恋の渕瀬ともそれは
さゝんれ 古恋一 一二の句へ影のよしみに蛍のとぶを見て。代へ
どみへ蛍のおひのまくぶの内の影ふしと見ゆる也影へ泥の
影也さて蛍は名のあれども鳴ともあきさ机なれは本ふ
の蓋のげくんねしと云にずく叶ふ也。たゞさんて蓋はも字そ
なくゆすて蛍の淡の漲なれば蓋もげくん泥してゞめのよ
どみにとぶ也三四の句へせくしと云行をうけて岩のせく下よ
はぷのしもむねられば。よどくいさんとそてせくしと云岩はき
ふとこりさて。思ひせくといへば蛍の恋の意でぞひをせ
くゆへ恋よ渕瀬乃意でぞよしむりは。よしみにこそ下に
後の本哥まは恋の渕瀬ともうきしらへとも。蛍へ影をせく
ゆへ恋よ渕がるそてそのよしみにとぶと云り 蓋よい火のいよ

ゆく思ひのひの字を火によせてよめる也し
し文字にゆるしよむも火の色ゆく也 ―夕されば蛍よりけに
もゆれども光みねばや人のつれなき 古今恋二 友則 ―音もせで
おもひにもゆる我も思ひはもえしぬべく也 後拾遺
ひまもゆく蛍こそ鳴出づりも哀也けれ 源重之 後拾遺夏
梶井宮二品親王家にて 斎今仕 水辺蛍
とぶ蛍いはかき渕のいはねどもふかきおもひぞよそにしらるゝ
岩垣渕はめぐりに垣のごとく岩のたてる渕を云。正篇 柳
風の湖より出。岩垣渕のいはをせきとゞめていはねどもといへり
思ひいづるときはの山のいはつゝじいはねばこそあれ恋しきものを
の格なり。渕は深き物なれば深き思ひにしたは 古今戀一
かくすゆく淺のをなかられぬしとなり。蛍をもてしへ
入たれども深きおもひのをゆく〳〵をのづからいでゝ光の

か
同しうつ［破損］ぬ也
思ひたえかぬる物からおのづからなびきぬれども
けたぬへけさぬ也。例我恋の尾花ぐさへけりと
てまはぬへ独りこる 侍従 東海の
ぬにけたぬ思ひよもに燗る 信定朝臣 勅撰五 蛍の思ひをすれば。水まも
けさぬねたりく水のあさりをたゆねぞさぶ也みなさびに
は水のさびかをして濁りさる江也。今の録やうるとく
夏り
とぶ蛍いはまの水ふみされても思ひは猶やもえしられん
飛蛍の岩まのおま。新は見ぬれても思ひは猶もえしられ
ぬりの岩中のゆのはいよりゆへすべてくる ―思ふとも
思ひしれまたわりるのえし〳〵ふれへ物

なくしめやあのゝをふりしく山川の岩まにかゝる寸トハくさき

前太政大臣公経公ハ西園寺殿也

二条入道大納言爲家　據色螢

ぬきとめぬ玉とみだれて東路の橋ふ飛螢は

緒絶橋奥州也緒絶るといふ玉をとぬきたる緒の絶

てみだれたるやうに螢をよみたる也

入道二品親王家五十首に　暁更螢

秋ちかき露もまがふまで海にはゆかしきみえし螢かな

螢火乱飛秋已近　白氏朗詠集　ちかき堤にて秋の近きといへる

けしきがましと云説がゆかしと云ちかき宿いかにも大ぬのゆか

ま。みちのゆかへ螢也といへり秋の近きそは

白氏の詩のみならずいへり例白露の玉にの

山にいへり螢作　勅選　前親王　門合せみ

句白露まて　叢端螢

草がくれ身にひめるをゆく蓋かれぬへ毛の

簾子には早のごとく白き毛の色也螢をそのま

まる也草がくれとハ簾子の草のかげなる也故也

夕螢

夕螢はそのまゝをもえて蚊やり火の煙れよそふ螢かな

そのかもえてし云。蚊遣火ももゆくゆく螢も同じや

うにもえて烟の下にまよふと也

杜蟬

風吹ハ木のはよりもらてきこゆる声を志みづの森の村蟬

杣泉なる信太の杜の楠の木の千枝に別れて枝ごとに

又六帖　信太の杜は楠して枝のしげきゆへ千枝とよ

めり声も志みざしと云かけたるは志のゝ志づまの事也

川社とのよめる人々守衣いかにかせたゝる七日八さゝ人のまく
逢寒ハかくこの里のさく居さのに露ちる夜すのかく文
新古 蟋のまきうになくあきが風につゝひてうつりゆく
千種のすゝくに鳴やう也
鳴蟋の涙に秋をさきだてゝかゝて露けき社すゝの森
社 露の海鳥もいまださふらなすくに兼て蟋ハ社すゝの杜と
秋蟋の鳴しと云ゆく涙とまめりすべて生類に涙なとゝむ
同し 後也露けさハ露しげきの略也蟋の涙ゆく露しげ
きといへり秋ハ露しげき物也社すゝの杜の夜の内に虫
て露しげきハ蟋の涙が露と成て秋をいそくやうなる
をさきだてるといへり涙ハまりて也
やうに露をささはなが秋をさきだてる
十代集五言一句 読ゆく 讀侍し 一石

秋声帯雨荷
白氏文集十 卷云潯陽秋懐贈許明府羅
江波涯邑 投烟鳥 秋聲帯雨荷 云秋聲ハ秋風
で声れ有也古文後集秋聲賦に秋風の音也
風渡る池の蓮の葉露落て秋に涼しき夜乃あされ
秋に涼しさと夜すがら秋のとくに涼しきも也
過ぎといさしも行風吹て秋にあとろく夜の夜の音
新古
文
夕立風
風吹き雲もかしみまハあま雲れすそになりゆく夕立れそろ
あま雲のよそにも人のかれりうさすがにめにハみゆる物から
あま雲のよそにのいてふる事ハ我かる山の風そみ
あま雲とは天雲まれ天雲也天の雲也風のちやさ

夕立の雨はふるとも見えねば天の雲が風にさそはれてたえだえにや
まよひたりし也。夕立は風吹て。見る間にすぎさるも
の也

野亭夕立 中納言
野はらのはしのとほりもおもしろくしし 云 風さわぐ村
雲ままふ夕立も見てますます見しられぬ君毛 野はらのへ八
月乃大風也疾風。礼記月令云。疾風曰占月風又曰仲秋疾風至。俗
に野分に暴風を用ゆる非也。月令云孟冬行夏令則国多暴風
と有。野分に兆 浅ぢが野分にあへる露の事も有
かさに見をいかにせん 又勅 比たぐひに比すべて
しぐれの比より風雲のさはがしに。今は野分の
風さわぎ雲ちりて夕立の後也。雲のままに

六月照大史家康家にて 夕立を
日ぐれする五月雨よりも夕立はしてはるかの方より
夕立は。まづ大雨のふりて。やがて晴る物也。され
の雨さる事は日数をへてふる五月雨よりはげしき
也。日数ふれ共は雨をとどめず
等持院贈左大臣家 納涼
さきの家をきてさえは松陰は岸を涼しがりけり
去年も君がつかれすぎし氷のたくはへしねへこそ
さわらぬだに涼しき松陰に岸まより来るのぼる
くる波を見てきて涼しき也。さて見むすびきしてとき
をきくさへ涼しきと云んこれ也
中園入道前太政大臣家三首 納涼
いづくより涼しき風のかよふらん日ぐらしのなく庭の

庭の夜木立の滋りたる陰には日影もさゝず涼しきさまいづ
まりが風の通り来て冴ふゆへ入涼しき也日ぐれの頃なれ
ば風ありくると云んこれ
此子さ大納言家月次三首に 水邊納涼
茂りし岸の木ずゑ打なびきてながき日ぐらし夜ぞ涼しき
一二句は岸の白糸の石のうへをとちるゞきを流るゝ体也
石ちしる滝なくとも松桜花にうつしてこそみぬ人のためすゞ
おもへとは延の字まで引きつくる縁也のがさんものちく
ともに云 よまかつる糸のうちまくてとりのをなすべく
衣や涼しんとつねに 秋上 日くらしとは終日と云体也 日くらし
に山家の時るはあしはふじのさゝねの室にぞ有
橋立の會は刈は草の花さき日くらし
鏡古に ちきさも子が宿のさゆりの花ぞつまみ
不涼まん 後京極 新後交 伊勢物語にくれがたきに夜の日くらしや流し
ものの事をなしぬる時なさと有はちぎさ日をくらし
てと云体にてがんがうの也ちぎさは糸の綱も有也
入道二品親王家五十首哥に
此まに秋なきも立つじころは山甚しこそあされ甚以下缺
此哥正篇夜詠に等持院贈左大臣家五首納涼此
ましと思ひ此河自身の本に此本にすし是に
あて此本に浄世寺正篇を見るべし
あさのまにゆふ涼けるは色たてゝ此秋は ねくる駿東の宅
夜夜みじかくて此秋する内にまたやうくゆかとしいかんとて
ゆふ付鳥の鳴てゆるといへり麻の葉にゆふを付
るまゆふつけ鳥と云ひけるたる也此秋の具にする事也
ゆふつけ鳥暁雪に出てり

六月祓

いつまりの河瀬よとゝハ流祓ゝてすゞきてたゞぬ淵となる
いつの世よりか川瀬よ。とゞまる流祓しても此の世までも
とたゞれて。絶ぬ淵と成ぬらん也。一本倒しぬれんし有
り例ハおほくまむしと云。一説あり竟界等の説也云云な
がれぞハ川の縁の詞まで。又なゞくし云んをこめりたな
が雑へてと云んも用る也淵ハ身のたえぬ抽なれバ。
むかしより今ハいづりて。みそぎのたえぬと云んを
ぬくめり